

達成目標理論 (achievement goal theory) とは、個人の持つ目標志向性に着目したものであり、課題に対しての達成目標の捉え方には「有能さを身につける」ことと認識する学習目標 (learning goal) と「有能さを証明する」ことに重きをおく遂行目標 (performance goal) の2つがある。近年、「他者からよい評価を得る」という遂行接近目標と「他者からの悪い評価を避ける」という遂行回避目標の区別もされている。問題解決行動 (上淵, 1995) や学業遂行 (田中・藤田, 2003) に対して、学習目標が促進的に、遂行目標が抑制的に働くという結果がみられている。

これらの研究の視点を看護学生の実習場面での行動に適応し、3種類の目標志向性が実習でのどのような行動と対応するのかと目標志向性の相補的機能の存在について明らかにすることを目的として研究を行った。

予備調査 対象は、成人老年看護実習を2~3回終了している准看護師科の学生6名で、事前に目標志向性尺度の質問紙に回答を求め、先行研究から予測した実習での行動について半構造化面接を行った。本調査 上記の学生を含む准看護師科の2年生76名 (有効回答: 71名) に質問紙調査を実施した。目標志向性と予備調査で抽出された実習行動、指導に対しての認識と将来の展望について回答させた。目標志向性の尺度は、学習目標、遂行接近目標、遂行回避目標の下位尺度から構成された18項目の Achievement Goal Scale (光浪, 2010) を使用した。4件法 (1: まったく当てはまらない~4: 非常に当てはまる) で回答を求めた。さらに予備調査や先行研究の結果から予想される実習行動についての31項目と指導に関する認識と将来の展望についての5項目に回答を求めた。

目標志向性尺度について因子分析 (主因子法・Promax回転) を行った結果、「遂行接近目標」「遂行回避目標」「学習目標」が抽出された。次に、目標志向性と実習行動の相関を算出したところ、遂行接近目標と相関のあったものは、記録の提出方法などのルールを守ること ($r=.25, p<.05$) や状況に合わせた援助計画の変更 ($r=.23, p<.05$) であった。遂行回避目標では、指導者などの評価を考え、記録に時間がかかる ($r=.24, p<.05$) ことや自己都合を優先した行動計画の立案をしたり、グループメンバーの行動計画を優先させることに肯定的な回答が得られた ($r=.20, p<.10$)。学習目標では、技術向上のための練習 ($r=.33, p<.01$) や教科書以外の文献の使用 ($r=.37, p<.01$) や事前学習を多めに行う ($r=.35, p<.01$)、看護師の動きを模倣する意欲 ($r=.34, p<.01$)、患者の苦痛の軽減 ($r=.21, p<.10$) などとの相関がみられたが、実習メンバーの実習状況への考慮は負の相関傾向 ($r=-.21, p<.10$) であった。調べたいことに集中して実習記録が不十分になることや何から手を付けていいのかわからず記録が未充足になることは、遂行回避目標 ($r=.20, p<.10, r=.21, p<.10$) と学習目標 ($r=.21, p<.10, r=.22, p<.10$) のどちらにも肯定的な回答が得られた。

加えて、各目標志向性と指導に関する認識、将来の展望との相関係数を算出した。遂行接近目標と指導後の気分の切り替えに相関 ($r=.34, p<.01$) がみられた。将来の展望である看護師としてやっていく自信は、遂行接近目標 ($r=.27, p<.05$) と学習目標 ($r=.22, p<.10$) に相関が見られた。さらに、それぞれの下位尺度得点を対象としてWard法、平方ユークリッド距離によるクラスタ分析を行った。結果、学習目標と遂行接近目標が低く遂行回避目標が高いCL1 (N=24) を「遂行回避目標高群」、学習目標と遂行接近目標が高く遂行回避目標が低いCL2 (N=23) を「遂行接近・学習目標高群」、各目標志向性ともに高いCL3 (N=14) を「3目標高群」、各目標志向性ともに低いCL4 (N=10) を「3目標低群」と4つの群を解釈した。次に、各CLを独立変数、指導に関する認識と将来への展望の各項目得点を従属変数として、1要因分散分析を行った。結果、「注意を受けた後でも気分を切り替えて実習に取り組むことができる」という指導後の気分の切り替えにおいて、CL4「3目標低群」よりもCL3「3目標高群」方が有意に高かったCL ($F(67) = 2.78, p<.05$)。

適切な学習方略の多くは学習目標と正の相関があり、実習生としては模範的であるが、それらの学習方略と相関の弱い遂行接近目標を持つものが、指導後の気分の切り替えはできており、実習での取るべき行動がとれていない。この態度をとることが、実習を円滑にすすませ自己効力感をあげ、将来への展望につながっている可能性がある。目標志向性の相補的機能の存在について明らかにするために「学習目標を高く持ち遂行目標を低く持つ群」と「遂行目標を高く持ち学習目標を低く持つ群」、両目標を高く持つ群の比較をする必要があったが、高低の比較だけで、相補性の存在までは明らかにできなかった。しかし、目標志向性だけに着目すると、先行研究で良いとされる学習目標だけでなく、遂

行目標を持つことも看護職では必要であることが示唆された。看護職は患者のニーズに応える職業であり、実践した看護に対しての反応に敏感になることや冷静な対応は、看護職の適性の1つであることから他者からの良い評価を求める特性のある遂行接近目標志向性も合わせ持つ必要があると言える。両目標をバランスよく持つことが、それぞれの目標の長所と短所を補うこととなり、看護職としての適性に繋がると考えられる。